

2024年度  
入学試験問題

国 語

2月1日 午前

□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- (1) 得意技をデンジユする。
- (2) ゆつくりとキュウソクする。
- (3) 低いタイセイで指示を待つ。
- (4) 社会にカンシンを持つ。
- (5) シュウカン誌の発売日。
- (6) セイミツな検査を受ける。
- (7) お気に入りの詩をロウドクする。
- (8) セーターを洗ったらチヂんだ。
- (9) 満ちシオの時間。
- (10) 学校でわとりをかう。

受験番号	氏 名

中村中学校

② 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

\* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

③ 浸透しんとうの仕方はたぶん過去に例をみないのでしょ  
うか。

④ 二〇〇八年九月からの世界的大不況だいふきょうが、このような  
ブランドにとっては **A** になったということはあるだ  
ろうけれど、それ以前から、旅をしているうちに、みな  
が同じものを着ているという現象は日本だけでなく世界  
中で起きていたように感じようになりました。

⑤ ドイツにいてもスイスにいてもH&Mがあり、北  
京や上海にはユニクロがありといった具合で、まるでコ  
ーラやマクドナルドのように、<sup>①</sup>世界のどこでも同じよう  
なカジュアルな服が買えてしまうのです。

⑥ また、衣服以外で同じことを感じたのは、家具のイケ  
ア。これもH&M同様スウェーデン発ですが、ドイツで泊  
めてもらった友だちと、オランダで泊めてもらった友だ  
ちが同じ和風の電球カバーを使っている、聞いてみると  
やはりイケアで、<sup>③</sup>ということでした。上海だったかで

⑦ さらに、携帯電話ならどこの国でもみなiPhone、みた  
いな流れもあり、このような世界の均質化には正直びつ  
くりしてしまうことがあります。しかも、普段着るカジ  
ユアルな服や、小さな日用品みたいなものが世界共通に  
なってきたというのが、これまでにはなかったことなの  
ではないかと感じています(もちろん世界共通といっても  
基本的には先進国に限られるのですが)。

⑧ 自分も、上海では家のそばのイケアでよく買い物をし  
たし、ヨーロッパではH&Mで服も買ったし、ユニクロ  
は日本でも上海でもちよくちよく利用していたので、そ  
の恩恵を大いに受けているのですが、しかしそれでも、<sup>④</sup>  
この現象ってどうなんだろう、つてちよつと思つてしま  
います。

⑨ もちろん、市場のニーズに応える商品を提供している彼  
れら

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

⑮

⑯

⑰

⑱

⑲

⑳

10 もちろん、そのようにいくつかの企業がひとり勝ちする現象が世界中で起きている一方で、その逆に、いまは

(近藤雄生『旅に出ようー世界にはいろんな

インターネットを利用することで、小さな組織や個人が、

生き方があふれてる』岩波書店)

これまでは考えられなかったようなことをやれる可能性が開けてきたことも感じます。

11 つまり、<sup>⑤</sup>凄まじいスピードでものや情報が流れるいま

65

の社会には、いろんな側面があるわけで、これがいまという時代なんだと認めるしかないのかもしれない。ただ、そんな時代に生きるぼくたち一人ひとりが、これから世界がどのようになっていつてほしいかについて、日々考えていくことは必要な気がします。

70

12 ファッションひとつにしても、そのような時代の流れがとても明確に現れるものなんだな、と旅をしながら感じたのでした。

問二 [A] にあてはまる言葉を次から一つ選び、記号

で答えなさい。

ア、向かい風      イ、波風

ウ、つむじ風      エ、追い風

問三 —— 線①「世界のどこでも同じようなカジユアルな服が買えてしまう」のは何の登場によってですか。本文中からあてはまる言葉を一語でぬき出して

問六 —— 線④について、

答えなさい。

(1) 「この現象」とは具体的に何を指しますか。本文中から六字でぬき出して答えなさい。

(2) (1)の例として当てはまるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

問四 —— 線②とありますが、「同じこと」とは何ですか。本文中の言葉を用いて四十字以内で具体的に説明しなさい。

ア、アイドルのライブイベントに友達と同じデザインのTシャツを着て行った。

イ、海外のドラマを見てると自分の家の机と同じものが出てきた。

ウ、アメリカに日本のすしチェーン店ができたので食べに行った。

問五 —— 線③の後に続く言葉を考えて書きなさい。

エ、<sup>とじょうこく</sup>発展途上<sup>おうえん</sup>国の応援をするために世界各国からボランティアが集まった。

(3) 筆者は「この現象」にやや不安を持っていることがうかがえます。その理由を四十字以内で具体的に答えなさい。

問七 次の文は、もともと本文中のある段落の最後にあつたものです。この文が入るのに適切な段落を選び、段落番号で答えなさい。

たとえば、ぼくがいろんな国を旅しながら記事を書いて生活するなんていうことはインターネットなしでは全く不可能だったわけです。

問八 この文章の構成について述べた文として間違っているものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア、**1**と**4**の段落では「ファストファッション」について、筆者の旅の経験や知識をもとに説明をしている。

イ、**5**段落では、衣服以外には世界中で浸透したものが無いという意見に対する反論として家具の例をあげている。

ウ、**6**段落では**5**段落同様に衣服以外の例を紹介している。しょうかいたうえで、これまでの段落で述べたことをまとめている。

エ、**8**段落は**7**段落での筆者の問題提起を具体的に説明し、**9**段落ではその理由を説明している。

オ、**8**、**9**段落と**10**段落では対照的な内容になっており、筆者としては今の時代の流れに大きな期待を寄せている。

問九 線⑤とありますが、このような社会の長所、

あるいは短所のいずれかを具体的に一つあげなさい。

い。また、それについてあなたの考えを述べなさい。

③ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

\*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

最初は旗だと思った。国旗のような長方形の旗ではなく、三角形のペナントが何枚か並んで、団地の一室のベランダに掲げられている。

少年は自転車に乗っていた。町の探検の途中だった。

三月の終わりに引越してきて、まだ一ヶ月足らず――

通学路からはずれたこの団地に来たのは、初めてだった。

自転車を停めると、見上げると、なあんだ、と苦笑いが浮かんだ。

旗ではなかった。竿をフェンスに掛けた、小さなこいのぼりだった。

部屋は三階だった。ベランダに干してある洗濯物の中に子ども服はなかったが、こいのぼりを揚げるのは男子のいる家なんだということは、少年も知っている。

お母さんは知らない。少年は学校から帰るとすぐに「遊びに行つてきまーす」とはずんだ声で言つて家を出て、町をあてもなく自転車で巡つて、夕方五時のチャイムが鳴るまで時間をつぶしてから、「ただいまーっ」とはずんだ声で家に帰る。

初めての転校だった。新しい友だちとどうなじんでい

けばいいのかよくわからなかったから、しくじった。最初はよかったのだ。クラスみんなは休み時間のたびに少年のまわりに集まって、前の学校のことをあれこれ訊いてきた。すっかり人気者だ――と、勘違いしてしまつた。

気がゆるんだ。質問に答えるだけでなく、なにか面白いことを言つて、みんなを笑わせてやろうと思つた。

前の学校や町のことを少し大きめに話した。この学校やこの町の感想も、ギャグのネタになるようにしゃべつた。

すると、それが「いばつてる」「ここを田舎だと思つてバカにしてる」ということになつてしまった。笑つてくれ

三年生か四年生の子だったらいいな。男の子がたまたまベランダに出てくる、たまたま少年に気づく、少年が「よ

お」と手を挙げて笑うと、男の子も笑い返す、そして二人はなんとなく仲良くなつて……そんな情景を思い浮かべながら、少年は自転車を停めたまま、こいのぼりを見つめた。

風が強い。こいのぼりはしつぽまで伸びて、ぱたぱたと音をたてて泳いでいる。小さなこいのぼりだ。竿も細くて短く、一尾ぐらいなら片手に持つて振り回すこともできそうだった。

風は少年にも吹きつける。埃っぽい風だ。団地の周囲に広がる畑の土が巻き上げられているのだろう、ときどき頬に小さな土のかけらが当たる。頬がⅠとするたびに、目を細め、自転車のハンドルを強く握り直して、肩をすぼめた。

町の探検をするときには、いつも一人で自転車をとばるはずのみんなは怒りだした。誰も少年の席には集まらなくなり、放課後のソフトボールにも誘つてくれなくなつた。

「そんなに前の学校がいいんだつたら、帰れよ、そつちに――今日、聞こえよがしに言われた。言つたのは、少年の話に真つ先に腹を立てたヨツちゃんだった。

男子のリーダー格のヨツちゃんは、好きなテレビやゲームやマンガがどれも少年と同じで、おしゃべりをするときのテンポやノリもぴったりで、クラスでいちばん仲間良くなれるはずだった。親友になれたらいいな、きつとなれるだろうな、と楽しみにしていた一週間前までが、いまは、ずっと昔のことに思える。

知らないうちにうつむいてしまつていた。顔を上げ、こいのぼりをもう一度見つめて、まあいいや、とため息をついて自転車のペダルを踏み込みかけたとき、こいのぼりが一尾、空に泳ぎ出た。Ⅱと開けた口と竿を結

んでいた紐が、ほどけたか、ちぎれたか、黒い真鯉が竿からはずれてしまい、風に乗って飛んでいったのだ。

少年はあわてて追いかけた。畑の真ん中にⅢと落ちたのを確かめると、自転車を乗り捨てて、ごめんなさいいごめんなさいしようがないんです、と謝りながら畑に入った。

団地の建物は古く、オートロックどころかエレベーターもなかった。陽のほとんど射さない階段はⅣとして、カビと埃の入り交じったにおいがした。

竿のあるベランダの位置を外から確認し、廊下に並ぶドアの数と照らし合わせて、奥から二軒目のドアのチャイムを鳴らした。

中から顔を出したのは、おばさんだった。少年のお母さんと変わらない年格好で、お母さんよりきれいで、そのかわり、お母さんより寂しそうに見えた。

こいのぼりが飛んでいったことを説明して、拾ってき

でも、五時のチャイムまではまだ時間があるし、断る

とおばさんはまた寂しそうな顔で固まってしまいそうだし、なにより、少年は気づいていた。台所の奥の居間に男子の子の写真が飾ってある。大きく引き伸ばした写真をきちんとした額に入れて、鴨居に立てかけて——田舎のおじいちゃんの家では、死んだひいおじいちゃんといひおばあちゃんの写真をそうしている。そして、部屋に染みついておいは、おじいちゃんの家でいつも嗅いでいるのと同じ……たぶん……きつと……。

うつむいて靴を脱ぐ少年に、おばさんは言った。「せつかくだから、お仏壇にお線香をあげてくれる？」

おばさんの息子は、タケシくんという。三年生の秋、交通事故で亡くなった。生きていれば東小学校の五年生

——少年と同じ五年二組だったかもしれない。仏壇に供えられた超合金ロボやトレーディングカードは少年の好きなものと一緒だったから、仲良しの友だちになれた、

たこいのぼりを差し出すと、おばさんはとても——少年が予想していたよりもずっと喜んで、感謝してくれた。

「ちよつと待っててね、お菓子あるから、持って帰って」玄関の中に招き入れられた。おばさんは玄関とひとつづきになった台所の戸棚を開けながら、「何年生？」と訊いた。

「五年、です」

「……東小学校の子？」

B  
けげんそうに訊かれた。

少年がうなずいて、「転校してきたばかりだけど」と付け加えると、おばさんは、ああそうなの、と笑った。固まっていたものがふつとゆるんだような笑顔だった。

「ねえ、ボク、上がっていきなさい。おみやげのお菓子はあるから、おやつ食べていけば？」

知らないひとの家にかかるのはよくない。お母さんにいつも言われている。

かもしれない。

おばさんは東小学校のことをあれこれ教えてくれた。髪の毛の薄い校長先生のあだ名が「はげっち」だということ、秋の運動会に親子競技があること、冬になるとクラスでストープ委員を決めること、学校のプールは真ん中が深くなっていて背が立たないかもしれない、ということ……。

ヨツちゃんの名前が出た。胸がどきんとした。タケシくんのいちばんの友だちはヨツちゃんだったらしい。「ヨツちゃんと同じクラスなの？　じゃあ、もう友だちになったでしょ。あの子元気だし、面白いし、意外と親切なところもあるから」

タケシくんが小学校に上がって最初に仲良くなったのがヨツちゃん、最後まで——いまでもヨツちゃんは、ときどき仏壇にお線香をあげに来ってくれるのだという。「ヨツちゃん、いろいろ面倒見てくれるから、すぐに友

だちになれたでしょ」

少年は黙<sup>だま</sup>つてうなずいた。一週間前までは、確かにそうだった。通学路の近道も、学校でいちばん冷たい水が出る水飲み場の場所も、教室を掃除<sup>そうじ</sup>するときの手順も、ぜんぶヨツちゃんに教わった。

「そうかあ、ヨツちゃんと友だちかあ……」

おばさんはうれしそうに微笑<sup>ほほえ</sup>んで、しみじみとつぶやくように言った。勘違い——でも、そんなの、打ち消すことなんてできない。

「じゃあ、タケシとも友だちってことだね」

おばさんはもつとうれしそうに言った。

少年がしかたなく「はあ……」と応えると、玄関のチャイムが鳴った。

外からドアが開く。

「おばちゃん！ こいのぼり、黒いのがなくなってる！」

飛んでつたんじゃないの！」

うがないだろ、とにらみ返して、そっぽを向いた。おばさんがジュースのお代わりを取りに台所に立ったとき、「さっさと帰れよ」とヨツちゃんに小声で言われ、肩を小突<sup>こぶ</sup>かれた。

少年も最初はそうするつもりだった。おばさんに嘘<sup>うそ</sup>がばれるのが嫌<sup>いや</sup>だったし、嘘をついたままタケシくんの写真に見つめられて遊ぶ自分が、もつと嫌だった。

でも、おばさんはジュースを持って戻<sup>もど</sup>ってくると、二人に言った。

「タケシも喜んでるわよ、ヨツちゃんに新しいお友だちができて」

④ 帰れなくなった。頬が急に熱くなり、赤くなって、そこからはいままで以上にゲームに夢中になったふりをした。ヨツちゃんも、ゲームのコントローラーを動かしながら、ときどき、テレビの画面を見つめたまま話しかけてくるようになった。そんな二人を、おばさんはずっと

125

玄関に駆け込<sup>か</sup>んできたのは、ヨツちゃんだった。

五時のチャイムが鳴るまで、少年はヨツちゃんと一緒にタケシくんの家にいた。おばさんに「やろう、やろう」と誘われて、三人でテレビゲームをした。タケシくんの家にあつたゲームはみな、少年も三年生の頃<sup>ころ</sup>に遊んだものだった。タケシくんが生きてれば友だちになったよな、絶対そうだよな、と少年は思う。去年発売されたシリーズの新作はもつと面白い。タケシくんが生きてれば絶対にハマつただろうな。

ヨツちゃんはゲームがうまかった。少年といい勝負——勝ったり負けたりを繰り返す二人を、「ひさしぶりにゲームすると、指と目が疲れちゃうねえ」と途中から見物に回ったおばさんは、にこにこ微笑んで見つめていた。

ヨツちゃんと仲直りをしたわけではない。ヨツちゃんは家に入って少年を見たとき、一瞬<sup>いつしゆん</sup>、なんでおまえなんかがここにいるんだよ、という顔をした。少年も、しょ

——ほんとうにずうっと、にこにこうれしそうに見つめていた。

先に「さようなら」と言った少年が団地の建物の外に出ても、ヨツちゃんはなかなか出てこなかった。放っておいて帰るつもりで自転車にまたがったが、このまま帰ってしまうのも、なんとなく嫌だった。困ったなあと思つてタケシくんの家のベランダを見上げていたら、窓が開いて、おばさんがベランダに顔を出した。少年に気づくと、「ちよつと待っててね」と笑つて声をかけ、フェンスからこいのぼりの竿をはずした。

しばらくたつて外に出てきたヨツちゃんは、真鯉だけをつないだ竿を持っていた。

「すぐ帰らないとヤバイ？」  
少年に顔を向けずに訊いた。  
「べつに……いいけど」  
「片手ハンドル、できる？」

185

180

175

185

「自転車の？」

「簡単だよ、そんなの、と笑った。道が平らだったら両手を離しても漕げる。」

ヨツちゃんはこいのぼりを少年に渡した。

「おまえに持たせてやる」

「……どうするの？」

「ついて来いよ。タケシのこいのぼり、ぴんとなるように持ってるよ」

そう言つて、自分の自転車のペダルを勢いよく踏み込んだ。

少年はあわてて追いかける。風を呑み込んだこいのぼりは、尾びれまでぴんと張つて泳ぎはじめた。意外と重い。しつかりと竿を握っていないと、飛んでいってしま

いそうだ。

ヨツちゃんの自転車は団地を抜けて、細い道を何度も曲がっていく。片手ハンドルの運転ではなかなかスピー

ヨツちゃんはまたさっきのように笑つて、手に持った竿を振つてこいのぼりを泳がせた。

「タケシつて……すげえいい奴だったの。サイコーだった。俺、いまでも親友だから」

「……うん」

「でも……おばさん、もう来るなつて。ヨツちゃんは新しい友だちをどんどんつくりなさい、つてそんなのやだよなあ、関係ないよなあ、俺が友だちつくるのとかつくないのか、自分の勝手だよなあ……」

ヨツちゃんは、悔しそうに竿を振り回す。こいのぼりは身をくねらせ、ばさばさと音をたてて泳ぐ。

「こいのぼり、ベランダからだど、川が見えないんだ。俺らいつも河原で遊んでたから、見せてやろうかな、つて」

へへつと笑うヨツちゃんを、少年はじつと見つめた。ヨツちゃんはそのまなざしに気づくと、ちよつと怒つた

190

195

200

225

230

235

ドを上げられない。ヨツちゃんも途中でブレーキをかけ

たり自転車を止めたりして、少年を待つてくれた。「かわつてやろうか」と言われて、「ぜんぜん平気だよ」と応え

ると、ふうん、と笑われた。いままでとは違う——転校

したての頃とも違う笑い方だった。タケシくんと一緒だった頃もこんなふうに笑っていたのかもしれない。そう思うと、急にうれしくなり、でも急に悲しくもなつて、竿をぎゅつと強く握りしめた。

河原に出た。空も、川も、土手も、遠くの山も、夕焼けに赤く染まっていた。

ヨツちゃんは土手のサイクリングロードに出ると自転車を止め、少年からこいのぼりを受け取った。

「俺ら……友だちなんだつて？」

少年は、ごめん、とうつぶした。おばさんが勝手に勘違いしただけだ、とは言いたくなかった。

「べつにいいけど」

顔になつて、「拾つてくれてサンキュー」と言った。

少年は黙つて、首を横に振った。

「あそこの橋渡つて、ぐるーつと回つて、向こうの橋を通つて帰るから」

向こう岸を指さして言つたヨツちゃんは、行こうぜ、

とペダルを踏み込んだ。

ハンドルが揺れる。自転車が道幅いっぱいには蛇行する。片手ハンドルで自転車を漕ぐのは、あまり得意ではなさそうだ。

少年はヨツちゃんの自転車に並んで、手を差し伸べた。「持つてやろうか」と声をかけると、ヨツちゃんは少し間をおいて「悪い」と竿を渡した。「べつにいいよ」と竿を受け取ったあと、ほんとうはもつと別の言葉を言わな

きやいけなかつたのかもな、と思つた。でも、そういうのつて、いいんだよ、もう、と竿を持った右手を高く掲げた。

205

210

215

220

240

245

250

こいのぼりが泳ぐ。金色にふちどられたウロコが、夕陽を浴びてきらきらと光る。

ヨツちゃんの自転車が前に出た。少年は友だちを追いかける。右手で、友だちの友だちを握りしめる。振り向いたヨツちゃんが、「転ぶなよ」と笑った。

(重松清『小学五年生』文藝春秋)

問二 〓 線A、Bの語句のここでの意味を次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- A 聞こえよがしに  
ア、相手をその気にさせるように  
イ、小声で聞こえないように  
ウ、わざと本人に聞こえるように  
エ、うそをついているとわかるように

B げげんそうに

- ア、とても興奮して落ち着きがない様子で  
イ、事情がわからず、納得なっとくがいかない様子で  
ウ、ひどいことを言われて怒っている様子で  
エ、心配なことがあり、不安が高まる様子で

問一

I 〓 IV にあてはまる言葉を次からそれぞれ

れ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア、ふわり イ、ひんやり ウ、ぼかん  
エ、ぴりつ オ、ほんのり

問三

線①とありますが、これについて説明した

次の文章の(1)〓(4)にあてはまる語句を本文中から指定の字数でぬき出さない。

クラスみんなが周りに集まり、(1 ※三字)だと勘違いしてしまった少年は、気がゆるみ、みんなを笑わせようと前の学校や町のことを少し(2 ※三字)に話し、この学校、この町のことを(3 ※六字)になるように話した。その結果、それが「いばっている」「ここを田舎だと思って(4 ※六字)」ということになってしまい、誰も少年のもとには集まらなくなってしまうこと。

問四

線②とありますが、このとき何に気づいていたのですか。簡潔に説明しなさい。

問五

線③とありますが、少年は一週間前まで、ヨツちゃんのことをどのような存在だと考えていましたか。解答らんに合うように十四字でぬき出さない。

問六 —— 線④とありますが、このときの少年の心情

として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、おばさんが自分にジュースやお菓子を差し入れてくれた優しさに心を打たれ、これからはヨツちゃんやまと仲直りして楽しく学校生活を過ごしたい。
- イ、おばさんがヨツちゃんと自分が友だちであると勘違いしているのに加えて、タケシくんも喜んでいられると言われたので、うそをつき通すしかない。
- ウ、おばさんがヨツちゃんと仲良くタケシくんの思い出のゲームをしていることに腹が立ったが、そのように考えている自分自身が恥ずかしい。
- エ、おばさんが言ったとおり、今ここでヨツちゃんと友だちになっておかなければ、後からまた学校で仲間はずれにされてしまいそうでこわい。

問七 —— 線⑤とありますが、ヨツちゃんの笑い方か

ら少年に対してのどのような感情が読み取れますか。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、タケシくんがヨツちゃんにとって親友であったのとは違い、少年にはある程度の警戒をしつつ、一応仲良くしておこうと思っている。
- イ、タケシくんに向けていたであろう笑顔と同じような笑顔で笑っているということから、少年に対しても同じく友情を感じている。
- ウ、ヨツちゃんにとって少年はもうすっかりタケシくんの代わりとなっていて、これからも二人で仲良くしていきたいと考えている。
- エ、ヨツちゃんからすると、少年のこれまでの態度はいまだに生意気に感じられ、そう簡単には友だちとは認められないと思っている。

問八 —— 線⑥とありますが、少年が右手で握りしめ

たものは、(1)具体的には何ですか。(2)それは、何を例えたものと言えますか。それぞれ答えなさい。